

白金葎

10月号



令和元年10月発行 第102号

定例会会（毎月第三金曜日）

十一月十五日（金）第二コロン…正午～三時…

十二月二十日（金）正午～三時…当季雑詠五句

一月十七日（金）第三正午～三時…当季雑詠五句

十月例会会報 （19 / 10 / 18 9名欠）

光成高志

秋十年道の軽みと太極拳
ととせタオ

ひつじ

稲孫田に白鷺の空高きかな

息を吸ひ息を吐くなり雁ゆけり

鶏頭のこの皺々を如何せん

星月夜四時に新聞取りに出て

佐藤宏之助

萱葺の本坊庫裡にちちろ鳴く

鳩鳥に沼のさざ波細かけれ

山門の屋根にびつしり草の花

キャンパスに三段掛けの稲架を組む

鐘一打一打に秋の深むらし

松村幸一

運動会聞こえてますか墓の子規

木犀の香のこんこんと畑へだて

惜しみなく木犀金を零すかな

立読みにニコライ堂の鐘の秋

百歳が近くて遠き夜長かな

増田陽一

二本脚提げゆく鴉台風前

鳥渡る運転免許返し来て

父が語る満州いまも黍風

たましひは螢火となり残る蟬

大鷹の古巢を敲き木の実降る

光
みち

混声の秋の蝉鳴く千年杉

糸口に残る玄米ご飯かな

野良猫に餌やる童暮の秋

切株の上に盆栽秋うらゝ

瀬戸物の狸転がる栗林

浅野正美

台風の目に静もるや曼珠沙華

飯田孝三

振り返り金木犀はどこに咲く
食べ頃の柿に届かぬ高枝切り
甘柿とだまされ渋に顔しかめ
臭いくる銀杏落つるバス通り
新米を炊きて仏に供へけり

田宮敦子

白桃を啜る口角たしかめて
秋の蚊を叩きたるこの掌
つつあと
蝗とり較べ銃後登校前
秋風に躓く手賀沼公園坂
柿秋の庭の筵に母嫂
あによめ

武者正子

秋の牧場デイベア乗せたベビーカー
戸を開けて後締めること知らぬ猫
秋の花読経の声の響きけり
秋の夜推理小説時読み終える
龍子の絵青の変化や秋館

磯目健二

黒い機影湖岸道路の空を征く
涼風に草取りをしたり力負け
台風の倒せし杉は病みてあり
枝奔放繁り残して秋来たる
台風の壊せし山河夢ならず

武者昭七

横転の鉄塔残し颯風去る
台風裡一別以来の電話かな
家も田も竜王のもの台風禍
手賀沼や満目の増水台風過

飛鳥路を辿れば残照雲を染め
どんぐりの落ちて転げる山路かな
見るだけよと言われてまわる道の駅

一句鑑賞

光成高志

百歳が近くて遠き夜長かな

幸一

百歳がもう直ぐ近くに来ていようでもやつぱり遠いと思う夜長である。読書家の幸一さんは秋の夜長を読書三昧に過ぐされておられるのであろう。日々の生活感がその心の動きと共に書かれた率直な佳句と思います。白寿が近い作者ならではの感慨でしょう。

秋の牧場テディベア乗せたベビーカー

敦子

秋の牧場をテディベアに乗せたベビーカーがゆく。ゆつくりと。牧場の牛が遠くに見える。近くには山羊もいる。ベビーカーには幼児が熊の縫いぐるみと同乗しているかもしれない。ひよつとしたらテディベアだけに乗せたベビーカーをお母さんが押しているのかもしれない。因みにテディベアは乳幼児の愛玩物として親しまれているだけでなく、精神安定をもたらす癒しの人形であるとか。

台風の倒せし杉は病みてあり

正子

房総半島を襲った台風十五号は杉の木を倒して電柱や電線に覆い被さり停電に追い込んだ。先月の健二さんのメールにあったように東電はまたも大慌て復旧に日を費やした。掲句はその様を正確に描写しています。ほんとに病んでいた杉だから強風に倒れたのだという発見と驚

きが病みてありの切れに生きています。擬人的な表現がこの句では身につまされます。

一句鑑賞

磯目健二

混声の秋の蟬鳴く千年杉

みち

成田市麻賀田神社の森厳な境内に樹齢千四百年の大杉が聳立している。太さ九メートル、高さ四十メートルの巨大な塔に似た樹木の下に立つと、あたかも混声合唱のような蟬の聲が降るように耳に響いてきた。この句に響き合う秋蟬の句に、たとえば「秋蟬のこゑ澄み透り幾山河」(楸邨)、「秋の蟬山倒るかに鳴きつゝのる」(永方裕子)。

鳥渡る運転免許返し来て

陽一

老齢となり意を決して長年の運転免許を自主返還したその手続きを終えて警察署を出てくると、折しも秋空を雁の群れが渡るのが目に入った。今や天地にも自分にも秋が訪れたのだという感慨が自ずと満ちてくる。

父が語る満州いまも黍嵐

陽一

現在の中国東北部である満州は、日露戦争、満鉄、満州事変、満州建国、開拓団など近代日本の発展と挫折の舞台であり、父の世代までの記憶に深く刻まれた地だ。満州の風土の特色に大連のアカシアと広漠たるコーリヤン(高粱)畑がある。コーリヤンは蜀黍(もろこし)の一種

で満州国の国花でもあった。引き揚げてきた父の脳裏には一望の高梁畑を青嵐のように風が吹き渡る忘れ難い風景があった。ベルリン・グランプリの中国映画「紅いコリーヤン」(張芸謀監督)は地平線まで広がる満州の高梁畑を背景に日中戦争下の若者の悲恋を描くものであった。振り返り金木犀はどこに咲く

正美

金木犀は橙黄色の小花を枝に密生させ甘い芳香を強く放つ。道を歩いていて漂う金木犀の芳香に、はて何処かしらと辺りを見回す。先ず嗅覚で感知したのだ。浮世絵の見返り美人図のような場面が思い浮かぶ。

惜しみなく木犀金を零すかな

幸一

オレンジ色の花びらと艶のある濃緑色の葉のコントラストが鮮烈な金木犀。約一週間の短い花盛りの終わりに、まるで金粉の散華のように小花が間断無く風に乗って散り続ける。視覚で捉えた花の姿であり、それなりに絢爛豪華な光景である。

一句鑑賞

増田陽一

鶏頭のこの皺々を如何せん

高志

鶏頭と言うのは花の上部がトサカに似ているからか、茎に近いほうを含めると、むしろ七面鳥にも似た異様な感じもする。大げさに言うとな条理な形というか、作者

には直ちに異様なものとして映った。即ち、「季題」という既成の約束ことではなく眼前直覚、言葉以前の感性で受け取ったのである。言葉にならず、つい「どうしようか」と思ったのである。浮かんでは見えたままの「皺々」という言葉であった。絶句した作者の感動を思わせるところが魅力である。

横転の鉄塔残し颯風去る

健二

一夜過ぎて野は静まったけれど、大型台風の過ぎた証拠にはあそこに高圧線の鉄塔が倒れているではないか。しかも「横転」と言った形に過ぎ去った風の凄まじさが見える。最も頑丈と思えた人工物が倒れ、他の草木は風をやり過ごして何でもなかったように日を浴びている。

百歳が近くて遠き夜長かな

幸一

近く(?)百歳を迎えられる筈の作者の述懐である。併し年月は近い遠いでは計れない、と。過ぎた年月への感慨は入である。そしてこの「遠き」は下五の夜長にも懸かっている。夜長はまた過ぎ去った遠い人生へのさまざまな記憶が浮かび消える時である。「近くて遠き」という技巧の冴えもさることながら、ここに込められた感慨は計り知れない。漸く九〇歳に近くなった筆者にも理解できる気がする。

混声の秋の蟬鳴く千年杉

みち

やがて死ぬけしきは見えず、とも詠まれた秋の蟬である。「混声」に、幾種類かが同時に鳴いているさまが判る。寒蟬とも言われる法師蟬に、みんな蟬も混じるであろう。蟬たちが共に残り少ない命を惜しんでいるのだ。儚い蟬に対して千年の杉が永遠のように立っている。

大観・春草・玉堂・龍子展（、¹⁹／10／4 4名）

豪華な山種美術館に入って日本画のパイオニアと言われる表題の四人の巨匠の作品を四人で見て回った。ロビーには大きなビデオ画面で技法の説明があった。筆は山羊熊鼯の毛をもちいるとか。大観と春草は性格が真反対であったが非常に仲が良かったとか。私は五浦海岸の美術館で座敷に並んで描いている一同の写真を見た覚えがあるし、多摩の玉堂美術館では、みちさんの「玉堂の瀑布天井より落つる」が虎童子さんに褒められたのを記憶している。又葉山の山口蓬春記念館にも行ったことがあるし、先に平山郁夫美術館にも触れた。玉堂は駒場の和館の襖絵の橋本雅邦の流れを汲むらしい。龍子は大きな絵を描いて会場芸術と揶揄されたとか、とにかく伝統を踏まえながらも新しい絵を模索した作品群である。日々新たにという芭蕉の言葉を日本画に表現したのだと私は

とった。ともあれ國學院大學に移動して、学生達の間に入って大変騒がしい会場であったが句作選句をした。帰途氷川神社と塙保己一の史料館に寄り駅前のカフェにて又句を出し合い一人十句をものにした。塙保己一は正美さんのお母様の敬愛する本庄の偉人でありその偉大さにちよっぴり触れたのも良かった。又半寿さんの口から農工大と外語大が発せられたのには少なからず縁を感じた。故園子さんとの句会の途次よく遊んだ農工大キャンパス、外大は私の現場実習の場所であって、又みちさんと大学祭に呼ばれて行ったことがあった。

光成高志

夏の海大観の波岩と松

「天長地久」幾本も色かへぬ松

玉堂の紅葉と水車よく似合う

玉堂の鵜飼篝火照り映える

龍子の絵大猷院に後の月

木菟の真ん丸の眼と眼を合はす

春草の朦朧体の瀑布かな

秋澄むや宣長の歌札貰ふ

秋麗やヘレン・ケラーの撫でし像

保己一の「源氏物語」や講義外は秋

無花果を食ったか叭々鳥肥満体

玉堂の溪山は秋人走る

大観の「天長地久」雁渡る

雲海よりトマト色なる日の出かな

玉堂の「水声雨声」秋の声

水澄むや「雨後」といふ絵に小さき滝

秋の夜や木菟一羽照らされて

玉堂の竹叢に吹く秋の風

落葉搔く片手で足りる竹箒

野分きて版木倉庫の窓小さし

青北風恵比寿の駅の待合せ

並木路米屋の前の稲穂かな

日本画や絵の具色々花野行く

丹頂の松にとまる絵秋の雨

大観の木菟の目秋館

大観の富士画く心天高し

秋の雷龍子の「鳴門」見てをりぬ

野分来て巫女二人持つ竹箒

灯籠に裸電球秋日和

光
みち

水引草追い抜かれたる下り坂

林半寿

一枚の画に水の音涼新た

巨匠言ふ画は人なりと秋高し

画の内に秘むる調べや秋澄めり

冷まじや猫を描くに筆幾本

日の大観月の春草秋深む

月あらば吾は句とせり美術展

秋霖の上がりて清し美術館

灯籠に裸電球暮の秋

神楽殿の屋根に緑青銀杏散る

偲びたる塙保己一曼珠沙華

受贈誌（令和元年十月号）

夕風や檢疫に錨下ろしたり（あすか十景）山尾かつひろ

山尾かつひろ吟行ノート十月（足尾銅山・干瓢剥き）

台風過暁星座よく見える

芋嵐この葉火男踊る如

留守の間に庭の穂蓼の勢かな

芋嵐帽子の鏢の翻る

杳杳の鉞毒事件鳳仙花

生き物のごとく干瓢剥かれゆく

光成高志

〃

光 みち

〃

長屋璃子

保田 栄

児童らの声して春の翁堂（義仲寺360号）

光成高志

咲き継ぎし木瓜供華とせん芭蕉墓（川）

光 みち

鏡花断想―「高野聖」のこと―

武者昭七

諸国回遊の若い僧が奥深い山中の一つ家であ会ったおどろおどろしい一夜の体験談が「高野聖」である。一人の旅僧が信州から飛騨に越えようとして洪水にふさがれた峠道にあえて踏み込む。しかしそこは長々とした蛇と雨のように降り注いでくる巨大な山蛭の巣窟だった。峠の頂上は山の神の支配する聖なる領域であり、かれらはそこを守護し俗界と聖なる世界とを限る賽神であり、神のつかわしめであった。旅僧はかずかずの試練の末ようやく一つ家にたどりつく。「立ち現れたのは小作りの美しい、声もすがすがしい、ものやさしい婦人である。」と僧は後に語るのだが。実は……。疲労回復のためと女は崖下の岩場での沐浴をすすめる。十三年前の洪水の際、村中の家を押して流して出現したなげれであるという。おんなは先に立ってせつせと崖をくだる。途中おおきなヒキが飛び出して女の足元にまとわりつくのを女は邪険にふりはらう。おんなの魔力によつて変身させられた人間だ。いまだに女に愛欲をすてきれないのだ。おんなはずんずん歩く。「あなたにはおばさんくらいなトシですよ。

お早くいらつしやい」とあねさん気取りで楽しげでさえる。谷川の水がよどみを作っている岩場に着くとおんなは僧衣を引きはがすようにして「おばさんが世話をやくのでござんす」と俗世間の世話女房ながら「すっぱり裸になつてお洗いたしまし、私が流してあげましよう。」と全身をくまなく流れでさすってくれる。その心地よさ。僧はひとと寄り添ってくる女の体で花びらのなかにつつまれたようになって、われを忘れて思わずおんなの腕にすがりつく。おんなのことが追い打ちをかける。「いいえ誰も見ておりはしませんよ」というおんなは、いつの間にか着物を脱いで全身を鍊り絹のように現わしていたという。離れて見れば着物を着た時の姿とは違う肉つきの豊かな、ふつくりとした肌。そこにはおとこを異界にさそう魔性のおんながたちあらわれていたのである。帰りの山道であつた頭と尾を草に隠して月明かりに横たわる巨大な蛇は女の形代だろう。同じころ僧に先んじて一つ家に踏み込んだ薬売りは女の妖術によつて馬にかえられていた。明日は馬の市だ。ではなぜ青年僧はその難を逃れたのか。女が汗のにおいをまといながら近々と旅僧に身を寄せたとき、おんなの意図は男女の秘儀であつたろう。近くには黒々と洞が口をひらいているではないか。洞は女性の胎であり異界への入り口だ。し

かし、僧はその手を振りほどく。その時僧を包んだものは「山の気か、おんなのにおいか、ほんのりとした佳いかおりだった。」という。「結構な香りのする温かい花の中へ柔らかにつつまれて」僧は全身を水にさらして陶然となる。僧は母親の胎が湛える暖かな羊水に浮かぶ胎児に変身していたのである。そのぬくもりの心地よさ。

山の気と女のおいに包まれて温かい湯の中に浮かぶこと。それはいのちの始原の世界に帰ることだった。水から上がった女は自分のお転婆を恥じて、「川へ落ちて川下へ流れ出したら村人はなんとするか」と問いかける。「白桃の花だとおもいます」という答えに、さも嬉しそうに「こやかに処女の恥じらいを含んで笑ったという。女は森の鬼女から一つ家の可愛い女に変わっていたのだ。しかしそのおなじ厩の片隅で葉売りは馬にかえられ市に引かれていくのだ。おんなは美しく気さくな一つ家の世話女房であり、同時に魔性のおんなであつたことがおやじによつて明かされる。翌日、愛憐の情をふりはらいながら僧は山をくだる。白桃が滝つぼに激しく浮き沈みするまぼろしが；；。鏡花は「お化け好きのいはれ少々」というエッセイの中で「僕は明らかに世に二つの大なる超自然力があることを信ずる。一を観音力、他を鬼神力とでも呼ぼうか。ともに人間はこれに対して到底不可抗

力のものである」という。高野聖のおんなは強力な鬼神というよりも聖なる水を管理する女性であり、鬼神力の主は山であり、そこに発する聖なる水であつた。山と水の神秘を鏡花はおいつづけた。

芭蕉のかるみ以後 (56)

光成高志

初懷紙(抄) 貞享三年芭蕉四十三歳のもの。

日の春をさすがに鶴の歩み哉

基角

元朝の日の花やかにさし出て長閑に幽玄なる気色を鶴の歩にかけて云つらね侍る、しかも祝言外に頭はる、流石にといふ手には尤感多し。

砌に高き去年の桐の實

文鱗

貞徳老人云、脇體四道有と立てられ侍れども、當時古く成て、只発句に云残したる景氣を云添たるをよろしとす。梧桐遠く立て、しかも木がらしのまゝにして、枯たる實の梢に残たるけしき、準^{まづ}へて言葉細やか也。桐の實といふは桐の木といふも同じことながら、元朝、梢は尚冬めきて、木枯の其儘なれども、ほのかに霞、朝日匂ひ出て、うるはしく見え侍る躰なるべし。桐の實を見付たる、新敷俳諧の處に侍るなり。

雪村が柳見に行く棹さして

枳風

第三、長高く風流に句を作り侍る、発句の景少し替め

あり、柳見に行んとあれば、未景に不_レ對也、雪村は畫の名筆也、柳を書べき時節そこの柳を見てかかんと、自ら舟に棹さして出たる狂者の躰、尤珍重也、桐の木立たるより畫師を思ひ出たる趣向、詠やうに寄侍る、付様大切なり。

酒の幌とばりに入篷の月

二齋

四句なれば輕し、其道の程の躰也、酒屋といふ物よく出し侍る、幌は暖簾とばり杯といふため也、夕の景色も有べし。

秋の山手束の弓の鳥賣ン

芳重

狩人鳥を射て、市に持て賣躰もあるべし、酒屋に便たる珍重の付やう也、手束の弓短き弓也、秋の季持鳥の多きを云ずして、秋の山と大様に置たる大切の所なり、看人心を付て翫味すべし。

炭竈こねて冬のこしらへ

杉風

前句共に山家の躰にみなして付侍る、獵師は鳥を狩り、山賤は炭竈こしらへて冬を待、別條なき句といへども、炭がまの句作、終に人のせぬ所を見付たる新敷句也。

里々の麥ほのかななる村緑

仙花

付やう別條なし、炭竈の句を初冬の末、霜月頃などの躰に請て、冬畑の有様、能云述べ侍る。惣而句段々の作りやうにて、深く付き浅く付大切也、浅く付べき所にて重く付んは、名句なりといへども專なし。

我のる駒に雨覆せよ

松下

是第奇異意也、何を付たるともなく、いづれを詠みたるともなく、里々の麥といふより旅躰云出し、村緑などのうるはしきより、雨を催し侍る景氣、辨口筆頭に不_レ儘。朝まだき三嶋を拝む道なれば

學白

これ、さしたる事なくて、作者の心ふかくおもひを籠たるべし、尤旅躰也、箱根前にせまりて、雨を侘びたる心、深切に侍る。

念佛に狂ふ僧いづくより

朱紘

此句、僅に興をあらはしたる迄也、神社には佛者を忌ム物也、参詣の僧も神前には狂僧也、三嶋は町中に社あれば、道通り僧もよるべき儀也。

あさましく連歌の興をさますらん

蚊足

連歌の興をさます、尤付やう珍し。かゝること度々家人の上にもある事にて、一入珍重に侍る。

敵よせ来るむら松の聲

千里

聞えたる通別儀なし、連歌に軍場思ひ寄るなり。

有明の梨子打ぶばし着たりける

芭蕉

付様別儀なし、前句に軍の噂にして、又一句さらに云立たり。軍に梨木打ぶばしとあしらひたる付やう輕くてよし。一句の姿、道具、眼を付て見るべし。

(以下略) 其卷末に曰く、右芭蕉翁の註なり、芭蕉翁に請ふて當流の意味心得がたし、願くば句解したまらん

やと侍りければ、即興加筆し侍る。終日の席、ばせを翁持病心よからず、五十韻にして筆をたち給ふ。

右のは十三句だけだが、十分芭蕉の評注が読み取れる。

元朝の日の花やかさに長閑に幽玄なる気色を鶴の歩みに掛けて云い連ねたのでしよう、しかも祝言が言外に顯われ、それを流石にという言葉を使った手法尤も感動するところですが、と言う風に基角の発句を評釈されたと理解できる。次の脇は、松永貞徳の立てた脇の付け方四通りあるというのも、もう古くなつて、只発句に言い残したる景氣を言い添えるのをよろしとする。梧桐の冬の様相を細かく描写してその中に桐の實を見付けたところが新しい俳諧と云うべきだと思います、と。芭蕉は桐の木がお好きであるらしい。後の炭俵に、芭蕉の十夜のかねの音に付けた野波の「桐の木高く月さゆる也」に芭蕉が腸はわたを絞つて付けたという、門しめてたまつてねたる面白さ、が忘れられない。次の雪村の句、五月雨の鳩の浮巢を見にゆかん、に近い俳味と思う。桐の木立より絵師を思い出でたる趣向詠み様に寄せたのでしよう、付け様が大切ですね、と。四句目は軽く柳を見に行く道の途中の躰なり、酒屋を出したところが手柄だというのである。幌は暖簾などというためでしょう、夕景色もありますね、と。次の句は狩人が鳥を射て町の酒屋に売りさばく珍重

の付け、手束の弓は四本指で握れる弓だから短い弓也と説明している。秋は持つてきた鳥が多いのを云わずして秋の山と大様に置いたところが大切、心をひそめてよく味わいなさい、と。前句共に山家の躰にみなして付けた。炭竈は獵師は鳥を狩り、山賤やまがたは炭竈をこしらえて冬を待つ、別條なき句といえど、炭竈を見付けた句作は新しい句ですと。里々の付け、特別なことはないけれども、炭竈を初冬の末霜月の頃の様子と請けて、冬畑の有様よく云い述べました。総じて句は段々に作っていくものであつて深く付き浅く付きが大切です、浅く付けるべき所を重く付けた句は名句といえども第一とはとれない。吾のる駒に雨覆せよの付けは奇異であり、何を付けたともなく、いづれを詠みたるともない。里々の麥より旅の中の様に言い出し、村緑などのうるはしきより、雨を催した景色弁口筆頭に儘ならず。三嶋の句は旅躰であつてさしたる事はないけれども、作者は心深く思いを籠めたのでしよう、箱根が目前に迫つて雨にがっかりしている心が痛切ですね。念仏に狂う付け、僅かに興を表したる迄也、神社には仏者を忌む物ですし、参詣の僧も神前には狂僧ですよ、でも三嶋は町中に社があるので、道を来た僧も寄つて拝みます、そういうことです。連歌の興をさますは尤もなる付けよう珍しい。このような事は家人の

上でもあることであつて一入お上手です。次の付けは書かれてあるとおり特に注釈することはない、連歌に軍の場面を思い寄せたのでしょうか。有明の梨子打ゑぼしの付けは別儀なし。前句戦の噂にして又一言言立てたもの、軍に梨木打ゑぼしと配合した付けは軽くてよい、一句の姿、道具立て、眼を付けて見るべし。この句については、服部土芳の赤冊子に付けの筋を説明している文の中に「前句の事をうけて、其句の勢ひに移りて付たる句也」とある。珍重とか珍しいとあるのは現代のめずらしいというよりすばらしい、好ましい、いいと言つたニュアンスだと思う。最後の梨木打ゑぼし着たりけるの芭蕉の句私はみちさんの縫つた烏帽子まがいの鉢巻を着けて兜ならぬ麦藁帽子を被り菜園に出ておりますので、この句の気持ちがよくわかります。

以上私なりの解釈を書いてみたが、連句の発句から付け句で流れるように場面が変わり前句を理解し即座に反応して付けを作る、これが流暢であり、又叙景句が主流であつて、現代俳句のような人事心象句はないということ、よくその時代のいわゆる世間をよく知つた者の集まり、つまり芭蕉の連衆であることが伝わってくる。吾の駒に雨覆せよの付け句はよくないと評があるだけで他は皆新しい句とか、よく言い述べているとか、感多しと

か、珍重也とか、翫味すべしとか、句の姿、道具眼を付けて見るべしとか、褒め言葉が並ぶ。私は基角の発句と最後に評注をした芭蕉の付け句の梨打烏帽子着たりけるとした軽い付け、自らも軽くてよしとしている所が何と云うかさかりとして意味深くこの連歌の格高く見えるのがちらつと見えたやうでわくわくしました。歴史も世間もよく知らなければこのような短文にてこのような評は出来ぬと思う。後世の今の私が芭蕉だからという先入観念は取り払つて素直に感動出来たこと、芭蕉の心にちらりと触れたよう思つた。

俳窓評論纂——啓泰誄他

＊H 20 年二月一日に多美子、みち、高志が啓泰さんの江戸崎を訪ねました。啓泰さんの菓子店裏の御住いで茶を馳走になり、羅漢山瑞祥院、旧旅館の寄り合い所から稲波干拓地のヒシクイを観察しました。まだ雪の残る道々、気配りの言葉をかけながらの案内がありました。その時啓泰さんから発せられた俳句を左に載せます。

渋柿の幾重のはての帆引舟

滝春一

饅頭を食つたか花の羅漢さま

ほくれい

トウモロコシ畑に尖つた星が出た

啓泰

ボルネオの沖へ沖へとインク壺

〃

とぼとぼと枯野を帰るちんどん屋

〃

ちんどん屋へくそかづらのアイライン

天保のポーの字払いの草津かな

最後の句は、頂いた「蛙と羅生門」に収載されている。

神の留守日の出はまだまだ左寄り

初日の出水にオオバン地に鴉

二拍目は大きく打ちて寒明ける

山百合や石岡府中国分寺

H21 九月から啓泰さんの蛙と羅生門 S62 年の句を紹介した。

山紅葉流れ流れてせせらぎに

私は道化者静かに月見うどん食う

雪降れば雪の中行く僕は鰻頭屋

師走句座相良訛りが帰りに行く

相良訛りとは？「きやあるが鳴くんで雨ずらよ」との歌詞が入っている茶つきり節のような遠州相良村の訛りです。

句座が相当盛上った様子が、皆の視線を集めて帰って行く様が見えてきて、師走句座の賑やかさが尾を引いています。

この後で第一句集（昭和56年版）が送られて来た。その冒頭に昭和三十年四月俳句入門第一声のまえがきがある左の句が載っている。

水ぬるむ小川の岸でせりをつむ

これをはじめとして選句した句を霞の会々報に掲載していったので啓泰さんとの交流が密になり句集やら自身の主宰誌亜などを

〃 〃

送って下さり啓泰さんの句に多く触れることになる。白金霞創刊直前にいただいた句作の方法論にかかわる手紙を後に載せて啓泰誄を続けます。

冬服に東京匂わせ慶子来る

芸者へ銅貨「はい」と渡して夏の雲

慶子は少女噴水の裏側にいる

どこまでも白き砂丘の鹿島灘

鉄煮えて枯野の星があふれ出す

ところてんつるりと淋しい顔になる

紫陽花は浮気な花と思ふべし

金子兜太はほんとに詩人という人がいるが、これらの句を読んでみると啓泰さんも根づからの詩人です、と思ふ。

会葬の他人のような妻過ぎる

魚網枯れべたんべたん水が鳴る

ひものまま煮ているかんぴよう御田植祭

ボルネオの沖へ沖へといんき壺

有名ないんき壺の句、句集を読んで行くと必然のように思えた。先の大戦で南太平洋に出征した兵士の方々、金子兜太、森澄男、霞の会では田中良弘さん、白金霞では森下流子さん、ボルネオの沖に感慨があるにちがいない。いんき壺にペンをつけてせつせつと俳句を作ったその壺がボルネオの沖へと流れいつて鎮魂をしているのだ。

釜飯のまわりがこげる草いきれ

冬闇のコンパス嗅げりピタゴラス

花杏そろりそろりと一匁

れんぎようやグラムにならない妻の爪

ともかくもポブラ並木の中で会う

蛙鳴く関東平野の珈琲店

昼蛙ひくひく潮来へあと五粒

三本の青桐揺れる芋銭沼

諸吊つて火の見の見える河童沼

くるみ提げ常磐線のすみに乗る

句集「白浪」を頂いた。その啓泰作品を抜く。

石炭が饅頭に化け秋の暮

トマトの木枯れてゆくなり十三夜

石炭や山椒魚の目に涙

ななかまど北畠親房小田城へ

白鷺が真綿のように立っている

「はやぶさ」が地球に戻り諸根付く

春の月サツカー場は大鯨

マスクしてきつねのような人ばかり

葭切の雑談つづく舟溜り

八月や広島からの白手紙

秋風やとんがり帽子の筑波山

高浜駅から見るとそう。石鎚山も面河溪からみるとこう見える。

物は八方から見るべし。

オリオンはエデンの東に現われる

ひしくいや潜望鏡のような首

象の鼻てんなノズルが糞を吐く

百号の啓泰さんの「ピーマンやポルトガルにも赤がある」について、彰一さんから質問があり、句会にて喧々諤々想像を膨らまして議論しました。適切な鑑賞が出来ない憾みがありました。句会報にはポルトガルの国旗とかワインなどに掛けているのだらうとして、国旗を貼り付けておきました。彰一さんとメール交換もあり、思い余って作者の啓泰さんに自句自解をお願いする手紙を出しましたところ、たくさん資料とともに、啓泰さんの俳句工房の扉を開けるような手紙を頂きました。手紙文は彰一さんによつて電子化されましたので、左に全文を掲載いたします。

「光成 高志さま・改めまして。

ピーマンやポルトガルにも赤がある

冒頭にこの句大したものではないと思つて下さい。但しこの

の弱輩が自分の子供として世に出したのですから、それ程

馬鹿なこと、つまり生活する上において、人さまに迷惑や

詐欺紛いのことはしてくるな、多分しないはずだと思ひ

ます。人間の子供の場合です。右の句の黒田彰一さんの

「赤は何なのか」ということは、多分作者は色々あると思ひ

ますが、その句柄(スケール)に見合つた赤に定着されるべき

だと考えます。当初の発端は、あのつやつやしたピーマンの

グリーン色の新鮮さ、おやピーマンにも赤があるはずなの

だが、多分ポルトガルにも赤があるという一瞬の横切のたわ

ごとです。しかしそれなら何故ポルトガルかということに

なります。私は俳句は(五・七・五)その構造は三十六歌仙の

連句を内包していると思つていますので、連句の変化と関

啓泰

係の俳句規範から言つて、ポルトガルの登場は肝要(重要)で行かぬかと思ひます。ゆでタマゴむけばてらたらポルトガル(第一句集S56)のポルトガルも同じこと。多分フランスの旗は青と紅と白の三色、ヨーロッパはこのような紅白プラス一色が多いと思いますが、旗ともいえないし、ワイン赤とも言えぬが、若しコルクの木に赤い花でも咲くのであればOKですがね。俳句予言で。俳句は言葉の絵画(啓泰言)と思つている小輩にとつてイメージの展開上のまとまりを作品性に求めます。「甘草の芽のとびぐのひとならび」(高野素十)ホトトギス四S時代の作品で、反対派からは素材本位の無内容外形的な些末主義として非難されたといひます。しかし俳句としての一つの光景を示し、それが俳句風景として定立しているとは私思ひます。物語性も多分ある。ピーマンの句は大したものではないが、素材本意の無内容かも知れぬが、海外ヨーロッパのポルトガル・オランダと共に日本にとつてはばつてんカステラ長崎にも縁のあるポルトガルにも赤があるとふと無脈絡に思つても許して貰ひたい。「赤ん坊はギヤベツの渦のように生まれてくるのか」(第一句集S56)を作りました。当初フランスは考えてもみなかったが、こんな謂があるのだそうです。ならば、海外昼と夜のトンチンカン(トンカン・トンカンならOK)な国に若しかして赤があるのなら、それも人類愛、情でしょう。故に「ピーマンやポルトガルにも赤がある」(白浪N22)当初小輩「ワイン赤」などではないと軽々に言つたことを取消します。関係と変化の法則から言つと赤

い糸でつながっているかも知れませんが。「ボルネオの沖へ沖へといんき壺」(啓泰)森澄男少尉の部隊は北ボルネオ、いわゆる死の行進で50人が5人の生還だつたそうです。そのボルネオへ発つていんき壺が登場しました。ピーマンの赤、あまりリリサーチされますと、九尾のキツネの大きいしっぽが出て来ますので、おてやわらかに。日本に紅白の幕。紅白の鰻頭。外国(とくに)に紅白の色プラスoneで国旗なりと。これもおもしろい。フランス・イタリア・ロシア多分紅白の幕が登場。黒田氏によろしくお伝え下さい。小生(こうい)という訳を書けるうちは俳句作れます。羽生天才とさいとう九段の将棋でさいとう九段は「羽生さんを破つて(四連勝)した頃より今の方が自分は強くなつていふと思ふ。しかし今は羽生善治さんには勝てなくなつて負けている。それは何故かというところ(自信がもてなくなつた)」と書いています。自信がもてなくなつたといふことは(慎重になつて)(分別が第一義に)出てしまつたといふことでしょうか。そこでまだ「ピーマンやポルトガルにも赤がある」と抜けぬけと外つ国(振つて行くのに恐ろしさを感じない)うちは、小生まだ俳句が書ける(作れる)。総花的駄言お許し下さい。うまく伝えて下さい。出来の悪い息子ほどかわいいという俳句馬鹿です。慎重になつたらもうおしまい。詰る、俳句作品性の確立に二乗倍に効いてくる赤でもありますまいから、せめて日本流紅白の幕引きでお願いします。ゲリラ戦法を採れるうちはOK。

H22十一月三日

青木 啓泰 丕

以上の手紙の前に左のような前触れの手紙をもらっていたので、これも示します。

光成さん いつもお世話になっております。いつもお手数をお掛けしております。黒田彰一さんのメール拝読。そのお返事を書く前に、小輩五人衆の「白浪 御笑読下さい。その今月号に例の『ピーマンやポルトガルにも赤がある』を出しています。この回答は少しおまちください。黒田さんにもあしからずお伝えください。ワインのことではありません。くだらぬ句ですので、サイレント方式ですが、白浪十一月号の評価いかにとぞ。そんなことを考えてますので、少々時間をとった訳です。「フランスがとんでくるなり火を焚けば」(啓泰でいどです)で御笑知下さい。高志さんも先刻御承知納得と思いますが、小生は滝春一門下、無季容認十七音基準律です。入信が口語自由型(鈴木石太)ですので、これが体質ゲノム(これを跋文でゲームと書かれて困りました)に合っているようです。いつか句会に出席させていただきたく思っております。…。要件にて。黒田さん熱心ですね。よろしく。既成概念に害されていない。それから季語のこと。季語重なりのこと、誤解多々あらん。平成22.11.青木啓泰 丕 追伸：丕P45編集長中山秀子氏がうまいこと言っています。御笑読いただければ小生うれしい。

丕十月号代表の一句鑑賞

中山秀子

「秋風に乗ってくるなり喉仏」(青木啓泰 典型的な「啓泰俳句」と言つて良いだろう。俳句に現われる個性こそ、作者の

渾身の命である。わずか十七音の詩型の制約の中で、いかにイメージを呼び起すか。単純明快ではない「啓泰俳句」。ここに並んでいる十七音の言葉は、それ自体が伝達すべき意味内容として読み手に送られるというものではない。「秋風」という言葉と、西洋では「アダムのりんご」とか言われている「喉仏」の言葉が無造作に投げ出されている。しかし、読み手はこの句を契機に読み手自身(ことに男性)の人生をも顧みながら、さまざまな連想を呼び覚まされるだろう。このように、一物を衝撃させる手法は、豊かな連想をもたらし効果がある。けれども私たちは、正岡子規の「写生」という名の単純明快なコンテクスト(文脈)を求めたがなのだ。俳句には省略と連想などさまざまな型がある。これからも「啓泰俳句」から目が離せない。

以上、啓泰さんの今回の手紙、関連文献の大ましを転写致しました。啓泰さんは今回正直に自らの俳句の抛り所を教えてくださいました。ほんとに有難うございました。俳人は皆自分の句作が良かれと思つて作句しているものですが、その作句の幅は非常に広いものと思います。私は敏子さんの中学生対象の俳句授業を手伝っております。絵画におけるレンブラントとピカソの絵を右左に貼つて、写真と構成という描き方が、俳句では、写生と取り合せと呼ばれていると説明しました。そして来年から取り合せの句もOKよと唱導しました。私の初学の師山口誓子は、正反の二物を衝撃させて、合なる季感が發揮されればよろしい。ただ

単に二物を並べただけでは駄目で、二物の間に縁が無くてならないといわれていました。私はそこを幾何学的に、正反を結ぶ一辺を長さとする正三角形を作りその頂点が合である。合は季感であり、私流には、源氏物語の如き、ものあはれがあれば良いとしました。正反が離れ過ぎると、正三角形を結び得なくなつて空中分解する。この合の感じ方は読み手の力量によるから、其処を全人格を持つて読む、其の力を養うのも俳句の俳句たる所以なのだと教えましました。こゝは、欠伸をする子もいて、理解できなかつたものと思われまします。「啓泰俳句」における中山秀子さんの管見は私の思っていることを秀子流にのべておられると思い、合点がいっています。句作に生かせるかは、また別な話でありまします。以上今回黒田彰一さんの詮議によつて、啓泰さんの長文の手紙を引き出し、ほんとに良かったと思います。短時間の俳句談義でも積み重ねて行けば、全人格の容量を大きくする一助になるでしょう。(つづく)

* 9.29朝日投稿欄に高校「文学」選択制に驚きと不安の見出しにて元高校教員の疑問が載つた。こゝろや舞姫などの作品を読み友達と一緒に解釈を考えたり行間にあるものを感ぜたりするのが文学の授業。ミニニケーションの間を取ることや他人をおもんばかるこゝろが養えます。16〜17歳の思春期に教科書に載つていたからこそ出会えた文学の中から人生のヒントを得ることもあるはずだと思います云々。(私のように国語の教科書を後生大事に持っている男はめずらしいら

しい。やっぱり実利に走る世が来ているらしい。)

* 生駒大祐の俳句：朝日俳壇 9.29の青木亮人の紹介にて平成俳句の金字塔だと書かれた若手俳人の句を左に抽出した。三橋敏雄や田中裕明に比肩しうる可能性を秘めた貴重な俳人であると。私は寺山修司の句に刺激されての句風ではないかと思つた。

うしなはれ

生駒大祐

おほどこかに冬日は雲を押ししけず

やまおりとたにおり立つてある冬木

いくたびも読みかへす冬桜かな

それはそれは見事な関東煮でした

初空や水とはうしなはれやすき

現代俳人はツイッターとかフェイスブックとかで交流している。それが極当たり前の世になっている。私もツイッターに登録したら一頭最初にトランプ大統領のそれが出てきた。啓泰さんにこういう句はいかがと聞いてみたかつた。

* 独歩の「武蔵野」の風景を描写するだけで作家の内面の寂しさや哀しさが伝わつてくると明治の青年達は感したという平田オリザの古典百名山は私の思いと同じだ。

* 以前取り上げた佐伯啓思の異論のススメに、「〇〇(こゝ)する世界が載つた。三島由紀夫を革命こゝに過ぎないとした江藤淳の論の紹介である。今の世界もリアリティに向き合わない何何こゝである。あの戦争とその死者たちが近代日本にとつて最大の経験である。そこをよく考え向

き合うことがせめて「ここ」を自覚することだと。

*10.5の朝日の書評に「パプロ・セルヴィーニヨ、ラファエル・ステイーヴアンス著の崩壊学、人類が直面している脅威の実態が載った。人類はこのままでは絶滅するという予告の本だ。自然破壊がその兆候だ。どうすればよいのか。現実を認め一切の望みを棄てよということだ。その上でのみささやかな希望と活路が見えてくると。」

お便り広場（到着順、敬称略）

『白金霞』（九月号第101号）確と読みました。読み通して感じたことは貴男のやさしい心ですね。特に陽也さん啓泰さんへの弔文は身に沁みました。「お便りひろば」も隅々までちゃんと読んでいますよ。それから10/4（金）の吟行は欠席します。末広句会と重なっていたのをすっかり忘れていました。ごめんなさい。追伸…広島へ行ってきました。二泊三日最も感動したのは江田島でした。10/18（金）の句会には出します。どこの句を出すか・それは内緒・ではまた・（102 宏之助）

暑い十月の幕開けとなりました。白金霞きれいな白雲と浅黄の空さわやかですね。九月号拝受先ず表紙を楽しみました。みみずが這い出てまだ居る小蟻が生き餌に沢山たかり残りが干からびて菊作りの方の話では葉を食べ

るバッタに手を焼いている、九月末から十月の東京に隣る町です。銀杏がびっくりする程高い所にオレンジ色の実をつけ地にも落ちていますが、昨秋の大量のみのりではありません。高温のなせるワザでしょうか。（中略）家電は十年も使えば大体ダメになるそうで私もウカツに過ごして来ました。ケチな話ですが捨てたもの、お弁当やお寿司についていた醤油ワサビタルタルソース辛子うなぎのたれ等々の小さな袋入の品々大量の保冷剤よくもこんなに大切に冷蔵庫に入っていたものです。物は持つてはダメ、若い人達のように包装紙紙袋もどんぐ捨てるべきと家電のNGでよく解りました。わけの解らぬ季節です。ご健康をお祈りいたします。（103 璃子）

拝啓 長らく失礼しております。台風15号千葉県の被害が報道されています。我孫子は字幕ではないな一と思っていました。遅ればせながらお見舞い申し上げます。家の被害はなかったのか。自分は元気です。九月十五日88歳のお祝いを娘や孫達が祝ってくれました。88歳という気持ちはまだなかったがそういう歳になったのかな一と感じています。敬具（103 健三）

（この時代、合理的思想に惑わされて、歳をとっても若いと言って褒められます。よく考えるとこれはおかしい。それでは何のために歳をとったのか。歳をとることとものを考えることと関係があるの

です。四十は不惑、六十は耳順、老年らしく考えることは若い者には出来ないことです。年の功は老年の功です。)

朝夕はずいぶん涼しくなりましたが、お元気ですか。

白金霞九月号有難うございました。俳句の添削をしていただきながらお礼の返事が遅くなりました。この時期芸術の秋で二つの絵画展に出展の予定で準備をしていました。竹原のブドウが美味しかったとのこと良かったです。俳句は勉強中でまた作って送りますので教えて下さい。今は落花生を作って二年目で収穫時期になりました。収穫後が大変です。害虫や害獣対策も大切な農作業です。急に寒くなりそうです。お身体を大切にお過ごし下さい。

(1016 昇)

前略敏子さんお便りありがとうございます。又心のこもった贈りものがありがとう嬉しかったです。米寿など心にもなかったけれど。そういう歳になったのか。私は元気でいます。野菜作りや畑が多すぎるので最近花作りを始めました。今は球根の植え時です。鉄砲百合水仙など植えました。私も今は元気ですが何時逝ってもおかしくない歳です。仲のよかった同級生もほとんどが逝ってしまいちよとさみしい気持ちもありますが自分の持つて生まれた寿命までではできることをやりながら寿命が来たら死ぬだろうそれが何時になるのか分からないのが良い。義父の逝つ

た歳までは生きたくないな?又台風十九号大雨大変なことになっていますね。大きな被害がなければよいがと祈っています。今日も由美子がおでんを作って持ってきました。ありがとうございます。拓也君の嫁さん恭子さん良い手紙書いていたね。いい嫁さんだと感心しているところです。又逢うことがあったら宜しくお伝え下さい。一人暮らしのわがままか、ぶらりと一人で小さな旅へ出るのが好きで自分の思うままに動くのが良いのか悪いのか分からんが自分の好きなように生きていこうと思っています。以上お礼のたよりまで。そこで一句といけば良いが何も頭に浮かばない。乱筆にてご判読下さい。(1016 健三)

前略少し秋が見えて来たようですね。地球がどうにかなるような災害があちらもこちらでも起こり何か不安な気がします。拓也君の所大丈夫でしたのでしょうか?氣になっていました。氣を使ってもらってほんとにありがとうございます。靴下ほしいと思っていたのでほんとによかったです。ありがとうございます。私はずいぶん良くなりました。まだ少し氣分がのらないと何もしたくなくります。皆さんによく誘われますので少しづつ出て行こうと思っています。今年は町内会の班長を仲君が受け忙しく仕事に役員会とがんばっています。私も出来ることは手伝っています。最初は心配したけど昨日も祭

でいろいろ大変でした。少し安心しました。お身体大切にがんばって下さい。無理せず二人の幸福を祈っています。
(10.16 幸子)

台風去って秋霖続き、寒くなりましたね。先日は雨にあわなくて良かったです。この間、上野での「コートロード美術館展」を見ました。セザンヌの代表作が並んで居て圧巻でありました。しかも老人無料の日。我が家では飼っているクワガタムシが次々に死に秋が深まって行きます。
(10.20 陽一)

前略一句鑑賞をUSBメモリーで送ります。宜しくお願い致します。長文のメールを書いたのですが送信の操作中に行方不明になりました云々
(10.20 健二)

我孫子日記
(陽一さん同様Jcomの有線が速く安全です。)

9/20	例会
9/25	SOA
9/26	麻賀田神社・宗吾旧宅
10/2	SOA
10/4	*2 山種美術館
10/5	*3 ヨガ
10/9	SOA
10/16	SOA
10/18	例会
10/19	ACC

*千年杉ぐるり廻って法師蟬

一間の蜘蛛の囀を張り主ゐる

雀蜂唸る義民ロードあり

宗吾旧居いつのものやら蟻地獄(みち)

曼珠沙華宗吾旧居に三十本

*2 満月と没骨法の梅の花

玉堂の石楠花匂ひ出づるかな

玉堂の早苗の束の根の赤き

豊年や早乙女の絵の懐かしく(みち)

八つ橋の杜若には蕾あり

秋風保己一像は硝子箱(みち)

保己一像の微笑み刷毛の微細なる

*3 秋澄むや東京今や故郷なる

編集後記

メール受信異常にて陽一さんの原稿を打ち込んだ。その最中その文章に感動した。何故というに、そこを読んで貰えば誰だって解るはず。人任せにせずこつこつやっている所以はここにある。文士は皆そうであろうと思う。

白金霞十月号(通巻第二〇二号 令和元年十月二十一日発行)

編集・発行人 光成高志 二七〇・二一九我孫子市南新木二二四・七

表紙の題字：加納綾女 写真は十月二十日の台風禍の白金霞